



Title	肥前長崎地方の準体助詞「ト」について
Author(s)	愛宕, 八郎康隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 25, pp.69-79; 1976
Issue Date	1976-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/32484
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-18T04:02:30Z

肥前長崎地方の準体助詞「ト」について

愛 宕 八 郎 康 隆

はじめに

長崎市中で、ごくふつうに、

○ムカシントワ ドンナトガ アッタ トー。昔のは、どんなのがあったの。

のような表現が、よく聞かれる。文意を、いっそうていねいに表わすと、「昔のカルタはどんなカルタがあったの。」となり、文中2か所の「ト」は「カルタ」を表わし、文末の「トー」は持ちかけことばの「の」に当る。

この前者の「ト」は、いわゆる準体助詞、後者の文末の「ト」は、先の準体助詞から転成をみた文末詞とすることができる。

この種の準体助詞「ト」およびその転成になる文末詞の「ト」は、ひとり長崎市域のみならず、長崎県全域、さらには九州地方に広く行なわれており、これが、いかにもよく、九州のことばつきを思わせる、枢要な事象となっていることは周知のとおりである。

この小論は、肥前長崎地方（長崎県域）の準体助詞「ト」について、その生態をみようとするものである。

I

「ト」準体助詞を見るにあたって、それが文中でどのような環境におかれているかに注目してみると、上接語では、(1)格助詞「ノ」、(2)連体詞、(3)用言（形容詞、動詞）の連体形、(4)助動詞の連体形などが見られ、一方、下接語について見ると、(1)断定の助動詞、(2)諸種の助詞（格助詞、係助詞）などへのつらなりが見られる。

このように、文中における「ト」準体助詞の、上接語、下接語との接続関係を見ると、それが、まずは体言相当の語として立っていることが見て取られる。が、これをつぶさに吟味してみると、そこに、体言とは異なる「ト」の生態面のあることもまた事実である。

I. A

準体助詞「ト」の用法を見るに、「ト」がまさに実質体言相当の役割りを果たす場合と、もはや実質体言相当のレベルにない場合とが見分けれる。

今ここに、実質体言相当の場合を、上接語との関係で見ると、

(1)～ノト、～ントのように、格助詞「ノ」(ン)に接する場合

(2)連体詞に接する場合

(3)用言に接する場合

(4)助動詞に接する場合

などが見られる。

(1)の格助詞「の」に連なる場合のものをみると、

○イマノトワ ヨー ナカ。今の（人形）

はよくない。（老女）＜樺＞

○キノーノトモ イッショニ。昨日の（代金）もいっしょに。（中女→中男）＜蚊＞

などのように、「ト」は連体格の「の」を受けて、まさに「ト」は体言なみに機能していることが注目される。

また、連体格の「の」は「ン」ともなって、

○ソコ^ン アッカ エダ^ントワ ナン ネ。そこの赤い枝の(木)はなにね。(中男→中女) <長>

○ムゴ^ントワ カイジュー^ンゴタン ネ。向うの(雲)は怪獣のようだね。(中女→幼男) <長>

○シタ^ンカラ ニバンメント^ンガー イクヨリマシター。下から二番目の(息子)が<学校へ>行っていました。(老男) <長>

のようによく行なわれているが「～ノト」の形態よりも「～ント」のものが、むしろよく行なわれている。

ところで、この、準体助詞が連体格の「の」に連なる形は、奥能登方言にも見られはするが、奥能登では、

○ナ^ンノカ^カ キャ。何の代金かね。

○ドコ^ノカ^カヤッタ ヤー。どこの車でしたか。

などのように、連体格の「の」の先行語が、「ナン」(何)、「ドコ」などの、いわゆる疑問詞に限定されがちなのに対して、ここ肥前地方では、それがきわめて自在であるのが注目される。

「ト」はまた、様々な連体詞ともよく接続する。

○コゲ^ント^トパー ウタイヨリマシター。

こんなの(歌)を歌っていました。(老女) <子>

○ソゲ^ント^トモ エテスル モー マーダ イジェ^ントワ ワタシタチャー ネー。そんなの(仕事)もさせられるもうまだ他にも昔は私たちはねえ。(老女→同) <蚊>

○ペー^トペー アゲ^ント^トモ アッタ。はいはい、あんなの(火鉢)もあった。(老女) <長>

○アゲ^ナト^トモ ツクリヨリマシタ 下。あんなの(かいば桶)も作っていましたよ。(老女) <戸>

などのように、「コゲント」、「ソゲント」をはじめ、「アゲント」、「アゲナト」の表現を見ることができる。奥能登の「カ^カ」準体助詞の場合がそうであったように、「ト」が取る連体詞は、ほとんどが指示機能を持った一連のものに限られるという傾向を見せている。

準体助詞が、その意味充足を得るのには、先行表現の文脈自体による場合と、具体的な現実の場面に依存する場合との二通りがいちおう区別される。前者を今「文脈の意味充足」、後者を「場面的意味充足」と呼ぶならば、今の、一連の、指示機能を持った連体詞に装定される「ト」の多くは、その「場面的意味充足」の場合を代表するものと言える。

次に、「ト」が用言をとる場合について見ると、動詞の連体形に接する場合、たとえば、

○ツクル^トトデ ナカ。ズメンバ カク トー。作るの(仕事)でない。図面をかくのよ。(少女) <長>

○アイブトマデ ウツサレトットデス ヨ。歩くの(姿)まで写されているのですよ。
(中女) <蚊>

などのような、「動詞連体形+ト」の表現はあまり盛んでなく、

○マックロカトワ キレーカリヨッタ。まっ黒いの(齒)はきれいでした。(老女→同) <川>

○オーキカトワ ハイリマシェン。大きい(魚)は<網に>入りません。(老男) <登>

などの、いわゆる「カ」語尾形容詞を受ける場合が目立つ。

「ト」が動詞連体形を受ける場合よりも「カ」語尾形容詞を受ける場合の多いのは、「ト」が具象具体の「もの」を表わしやすく、その具象物の属性の表現と関係深い、一連の形容詞の活躍によるものであろう。

ところで、先に、「ト」の「場面的意味充足」の代表的な場合として、指示機能を有する、一連の連体詞に連なる場合にふれたが、これらと対照的なのが、

○ミコシノ チーサカトガ フターツ。御輿の小さいの(御輿)がふたつ。(老女) <奈>

○ミカンノ ウマカトバ モッテ キトツタジョン ブー。みかんのおいしいの(みかん)を持って来たんですけどねえ。(中女→青女) <平>

○イジノ ヒラーカトバ チゲテ……。石の平らなの(石)を投げて……。 (老女) <宮>

などの諸例で、これらは、いずれも「ト」に対応する実名詞が、一文の文頭に先行するもので、「ト」の「文脈的意味充足」の代表例とすることができる。(2文以上の連文にわたる場合の「文脈的意味充足」は多いが。)一文内に見られる「文脈的意味充足」の表現型式としては、定型的とも言える

実名詞+の+形容詞+ト

の型式が、ひとりよく行なわれている。

次に、「ト」が助動詞の連体形を受ける場合について見ると、

○ダレ ネー。 コンチ トコ ヌギステタトワー。誰ねえ。こんなところへ<シャッ>を>脱ぎ捨てたの(人)は。(青女→同) <長>

○ワーガ キャータトバ ヨミエントジャモン。自分が書いたの(ことば)を読むことができないの(だもの)。(青男→青女) <平>

などのように、いわゆる完了の助動詞「タ」を受けるものがきわ立って多く、

○ニトットバ モットツ ヤッカ。似ているの(洋服)を持っているではないか。(青男→少男) <長>

の「トル」(所によっては「 Chol 」)を受けるのが、「タ」を受けるものに次いで見られる程度で、いわゆる体言が、広く、様々な助動詞を受けるのにくらべて、大巾な制約が見られるのは、奥能登地方の「カ°」の場合とともに注目される。

なお、

○コメンター コモニー モランゴトシテ。米の(俵)は<編み目を>小さく漏らないようにして。(老女→同) <蚊>

○イエッター シター。ソゲンター。よくやった。そんなの(仕事)は。(老女→同)
 <蚊>

○ソギャン フトカター ハジメテ バン。そんなに大きなの(なまこ)ははじめてだよ。(中男→同) <小>

○ソゲンター ツカイヨッタトジャロー ネー。ナワバ。そういうの(いわしの目ぬき)に使っていたんでしようねえ。縄を。(老女→同) <蚊>

などのように、「～トワ」が「～ター」に、「～トニ」が「～ター」にも実現され、くだけた気分をかもし出すことにもなっている。

さて、ここでいったい「ト」準体助詞が、場面や文脈に依存して、どのような意味内容を充足し得ているか、つまり、どのような意味機能を発揮しているかを吟味してみると、これまでの諸例でもわかるように、「ト」は、「カルタ」、「火鉢」、「魚」、「御輿」、「みかん」、「石」、「洋服」、「俵」、「なまこ」、などの、きわめて具象的なものをはじめとして、「歌」、「仕事」などの抽象的なものまでをも表わしている。ほかに、「人」や「雲」をも表わす事例が見られる。ここに意味機能上、「ト」準体助詞独自の融通性を見て取ることができるが、一方に、「ト」が表わしにくい傾向を示すものとしては、およそ、次のようなものを指摘することができる。

- ① 極度に抽象的なこと……若さ、生命、努力、喜びなど
- ② 気体状のもの……霧、もやなど
- ③ 広大なひろがりのあるもの……海、空など
- ④ 時間、場所……日時
- ⑤ 人名、地名などの固有の名称

などがそれである。が、気体状のものでも、たとえば、

○ムコントワ カイジュエアゴタン ネ。向うの(雲)は怪獣のようだね。(中女→幼男) <長>

のように、「雲」も、くまどりをもって、まとまりを示すものについては、「ト」で表現する。また「山」のような巨大な対象についても、一般には、目前の山(たとえば、今から登ろうとして、視野に収めている山)などには用いず、所有の対象としての山の場合などには、

○アスコン エンタ ドゲドケ アッタ ナー。あそこの家の(持ち山)はどこどこにあったかしらね。

のように用いる。

これは、一面から言えば、巨大な対象も、表現主体との距離を介して、観念の中で対象化される時は、「ト」で表わすことができるということである。「ト」がたてまえとして、具象物については、くまどりのはっきりしているものを表わす働きが、こと、巨大な対象で分界のはっきりしないものに対しては、具象物のくまどりに見あう、主体との距離による観念化によって、これを対象化するという方向をとっているように見受けられる。

結果的に言えば、準体助詞「ト」で表現されたものは、視覚的にであれ、観念的にでもあれ、まどまり性を持つということであろう。

このような「ト」の性格を、「ト」の結廓性(ひいては、準体助詞の結廓性)と呼ぶことにしたい。これを要するに、準体助詞「ト」は、その表わす対象が具象物で、くまど

のはっきりしているもの、規模の大きなものよりは、小さなものを表わしやすいと言えよう。

I. B

I. Aでは、「ト」が、実名詞相当のものとして実現するものを見てきたが、「ト」はまた実名詞相当の地位をおりて、言わば形式名詞に近いレベルにとどまるものが見られる。

- ミソ^バ ツク^トニ^デス ^{ネー}。味噌を作るのにですねえ。(老女) <長>
- イク^トニ コマル^ト モン。行くのに困るもの(中女→青男) <茂>
- ドケ^ー オンナハッ^トカ シラ^ン。<先生が>どこにおられるのか知らない。(老女(大))
- クサ^カケン オニガ^ト デ^トイク^トデ ナカ^デス カ。臭いから鬼が出て行くのでないですか。
- アシ^タマ^{ジャ} モット^{ジャ} ナカ^ロ カニ^ャ。明日まは(天気は)もつのではないだろうかね。(老男) <平>
- ズッ^ト アッ^トナラ ヨカイ^トン。ヤッ^パリ ミカ^ケヤ モン^{ネー}。<活き造りの美しさが>ずっと続くのならよいけれども。やっぱり<料理は>見かけだものね。(中男→中女) <串>

などがそれである。

このような「ト」の用法の中で注目されるのは、「ト」に断定の助動詞が下接する場合である。なかでも、「ト」に「デス」が下接する表現が注目される。

- アレ^チガ オーカ^トデス。荒れ地が多いんです。(老男) <白>
- チカゴ^ロ ワッ^カ ヒトガ^ー スッ^トデス ヨー。近頃は若い人がするんですよ。(中女) <奈>
- ソコ^ン シタ^ニ オラ^スト^デス タイ。そこの下におられるんですよ。(中女) <子>などがそれである。

このような、「～トデス。」、「～トデスヨ。」、「～トデスタイ。」の文末形式の表現がまことによく、広く聞かれる。これらの表現形式は、今日、肥前長崎地方のみならず、広く九州の多くの地域で、ややあらたまりの、恰好な説明表現の形式として、深く定着しているように思われる。

- ヨカ^トヤ モー。いいんだもの(少男→同) <長>
- ワダ^{シャ} ノミ^キラン^トヤ モン^{ネー}。私は<お酒が>飲めないんですものねえ。(中女→老女) <長>

などの「～トヤ」の形式はふるわず、また「～トジャ」は、ほとんど聞かれぬ。ただそれらの推量形となると、

- テレ^ビニ ダス^トヤロ。テレビに出すんだらう。(少男→青男) <小野>

などの「～トヤロ」が比較的よく行なわれ、

- トシャ^ー ドギ^ャン アッ^トジャ^ロカ。年令はどうだったんだらうか。(中男→老女) <三>

○ソツト チガウトジャイロー。それと違うのだろう。(老女<母>→中男) <戸>
などの「～トジャロー」, 「～トジャイロー」などもいくらか聞かれるが, 推量形では,
やはり,

○ココデ カヤッテ ソトサン ツットデショー。ここ(大村湾)で卵から稚魚になっ
て外海へ出るんでしょう。(老男) <登>
などの「～トデショー」がよく聞かれる。

ところで, 「～トデス」形式の中に,

○ワッカ ヒトノ 下ー ナリマストデス カー。若い人がどうなりますんですかね。
(老女) <登>

○ソーデ ゴザリマストデス 下ヨー。そうでございますんですよ。(老女) <登>
などのような, 「～マストデス」の特異な, ていねい表現が見られる。ここには, 準体助
詞「ト」のユニークな機能を見て取ることができる。

ちなみに, 「～トデス」は, 微視的には, 「ト」と「断定の助動詞デス」とのことは続
きと見られるが, 巨視的には, 「ト」準体助詞が, 上部表現を体言的にまとめあげ, それ
を下接の断定の助動詞によって断定づける表現法, つまり, 一種の体言化終止の表現法と
して見ることができる。

「ト」は, そのような体言化終止表現法の仕立役としてユニークな機能を発揮している
と言えよう。

ここで, 「ト」の品位について見ると, たとえば,

○ソーデ ゴザリマストデス 下ヨー。 のように, きわめて, ていねいさのまきった
表現にも用いられる反面,

○ソツト チガウトジャイロー。それと違うのだろう。(老母<母>→中男) <戸>
のように, 家族間でのなれなれしい表現にも用いられるというぐあいである。

このように, 「ト」には, 固定的な品位があるというよりは, 所属の文表現の品位に対
応的で, 融通性に富んだ巾を持っていると言えよう。

II

準体助詞「ト」はまた, 下接の接続助詞や格助詞と結合して, あらたな接続助詞を形成
する。

その順接のものとして, 「ケーニ」, 「ケン」, 「ケー」などとの結合になる,

○ウエニャー ウエノ オットケーニ モー ナラワント ヨカ サー。ハテナジ。上
には上がおるんだからもう習わないでよいよねえ。きりが無い。(老女) <蚊>

○ベラ イッチョットケン。たくさん入っているから。(老男→同) <木>

○オソエチョラントケー。教えておらないんだから。(老男→同) <木>

などの「トケーニ」, 「トケン」, 「トケー」がある。これまでの調査では, 長崎半島の
蚊焼での, 文中に来る「トケーニ」を除いては, 多く文末に用いられるようである。

「トケーニ」と, 意味上, ほとんど変わらないものに, 「ト」と接続助詞「シェニ」との
結合になる

○ミガイニャー ジーサンモ バーサンモ オットシェニナーイ。自分の家にはじい

さんもばあさんもおるんだからねえ。(中女) <川>
の「トシェニ」がある。

逆接の接続助詞では、「ト」と格助詞「ニ」との結合になる「トニ」が注目される。

○タナカサンモ キツカトニ ガンバンナル ネー。田中さんも苦しいのによくがんばられるねえ。(中女→青女) <長>

は、文中例であるが、多くは、

○ヨースケガ フトークチ ユエバ ヨカトニ。浩介が一口言えよいの。<気が利かない。>(老女) <木>

のように、文末に見られがちである。

「トニ」は、また

○トマバ ツンデ キチヨッジャトン ワリヤ イラン トカ。苫を積んできているんだがあんたはいらぬのか。(中男→) <奈>

のように「トン」ともなっている。「トニ」が「トン」ともなると、接続助詞としての一語性は、いっそう明白と言えよう。

「トニ」と「カラ」との結合になる、

○アソコワ オヒルニ オワットットニカラ。あそこ<の店>はお屋に終わっているのに。(中女→老女) <長>

の「トニカラ」も見れる。

他の一連の接続助詞(「トケーニ」、「トシェニ」、「トテ」、「トバッテン」、「トナイドン」、「トナンジョン」など)が、既成の接続助詞と「ト」との結合になるものであるのに対して、「トニ」は、格助詞「ニ」との結合になる新規生成の接続助詞である点が注目される。

これは、奥能登地方での、準体助詞「カ°」と格助詞「ニ」との結合になる、接続助詞「カ°ニ」の生成と、彼我軌を一にするもので興味深い。

ほかに、「ト」を要素に持つ、逆接の接続助詞には、

○カイモノニ イゲバ ヨカトテ テレビバ ミヨッ トー。買いものに行けばよいのにテレビを見ているのよ。(中女→同) <蚊>

の「トテ」、

○カタチャー シットットバッテン ジェンジェン ソノ ツクリミチバ ワスレタ。

形は知っているんだけどもすっかりその作りかたを忘れた。

の「トバッテン」(「トバッテ」)、それに、「ナレドモ」からの「ナイドン」と「ト」との結合になる

○クサカリ イタトナイドン ユーユー アメノ フツテ。草刈りに行ったんだがたいそう雨が降って。(中男→老女) <宮>

の「トナイドン」、あるいは、

○オカネバ カットットナンドン。お金を借りているんだけど。(青男→中女) <平>

○ソリヤ ヨーガストナイド。それはいいのですけれども。(老女) <宮>

などの「トナンドン」、「トナイド」。それに、

○サゲバ イッピヤ ノマシューテ オモットットナンジョン。酒をいっぱい飲ませよう

と思っているんだけど。(老男) <平>

○モチ^ツット ヒロカレバ サ ヨカ^トジョン。もう少広ければね、よいんだが。(老男
→青女) <原>

の「トナンジョン」, 「トジョン」など, 多彩なものがある。

順逆を問わず, 「ト」を要素に持つ接続助詞の多くは, 「ト」要素なしの接続助詞のものにくらべて, その接続部位に軽い断定性が醸成される点が注目される。

肥前長崎地方の「ト」要素を含む接続助詞が順逆双方によく見い出されるのに対して, 奥能登地方では, 「カ°ニ」を除けば, それをほとんど見い出しえないのは, 「カ°」, 「ト」彼我準体助詞の生態面における方処の差異と見ることができよう。九州の「ト」の活況の一端をそこに見る思いがする。

III

準体助詞「ト」はまた,

○イツ キタ ト。→○キノ^ー キタ ト。いつ来たのか。 昨日来たんよ。

のように, 文末詞への転成を見せている。

この「ト」文末詞がまた, 日常きわめてよく行なわれており, 九州のこぼつきを支える重要な事象となっているのは周知の事実である。

○ダス コトワ^ー デケン 下。出すことはいけないけんですよ。(中男) <樫>
のような上げ調子に終る「ト」, あるいは,

○ジョ^ーリバッカ ツクリマシタ ト^ー。

草履ばかり作りましたのよ。(老女) <川>

のように, 高音長呼に実現する「ト^ー」, 先の低音に終る「ト」などに, 「ト」の文末詞としての安定を, よく受け取ることができる。

このような「ト」は, 当地方の, いわゆる複合形文末詞の基素(つまり頭部要素)として, まことに巾広い活躍を見せている。「ト」を基素に持つ, いわゆる複合形文末詞は, 次下の諸例に見られるように, きわめて多彩である。

○イチ^ョグライ シトリヤス トナー。<畑は>1町ぐらい作っておりますよねえ。
(老男) <木>

○ドケー イク トナーイ。どこへ行くのかね。(老女→中女) <金>

○コレ ヌージ ヨカ トナヤ。これを飲んでよいのかね。(青男→同) <手>

○イキヨッ トネ。行きよるのね。(中男) <樫>

○ナンバ ショッ トノー。何をしているのねえ。(中女→少男) <樺>

○イマ ドコニ オッ トヤ^ー。今どこに住んでいるのかい。(青男→同) <高>

○イロイロ アリマス トヨ^ー。<道具は>いろいろありますのよ。(老女) <樺>

○ミンナ オ^ワチデ アソビヨッ トヨ^ネ。みんなお家で遊んでいるのよねえ。(青女<母>→幼男) <高>

○ハ^レモンノゴト アッ トゾ。腫れものですよ。(老女) <白>

○ブンブンムシモ ベラクソ オル トザ。かなぶんもたくさんいるのよ。(少女→青女) <宮>

- ソガ^ン ユ^ータ トザ^ン。そんなに言うたんだよ。(青男→青女) <平>
- シ^ット^ッ トゼ^ー。知ってるんだよ。(老女→同) <川>
- ニ^{シャ}ー ドケ^ー イク トカ^フ。お前はどこへ行くのか。(青男→同) <蚊>
- チ^ンバ スッ トキ^ャ。何をするのかい。(中男→同) <川>
- ワイ^ワ チ^ンバ ショ^ッ トケ^ー。お前は何をしているのか。(中男→少男) <樺>
- カイ^{モノ}ニ イ^ッタ トカ^ナー。買い物に行ったのかねえ。(青女→中女) <長>
- ア^タンナ チ^ンバ ショ^ッ トカ^{ナイ}。あんたは何をしているのかね。(老女→同) <口>
- ド^ゲン シ^タ トカ^ネー。どうしたのかねえ。(中女→同) <長>
- コ^ラ ド^ガン スッ トカ^ニャー。これはどのようにするのかねえ。(中男→独白) <口>
- コ^ルガ ヨ^ー キ^ク トタ^ー。これ(薬)がよく効くんだよ。(老女→幼女) <平>
- イ^エンノ ア^ッ トタ^ーイ。縁があるのよ。(老女→同) <長>
- ミ^チバ サ^ルキヨ^ッタ トタイ^ネ。道を歩いていたのですよね。(老女) <蚊>
- ソ^ガン スッ トモ^ネー。そのようにするんだものねえ。(老男) <木>
- ア^スージョ^ッタ トバ^イ。遊んでいたのですよ。(老女) <川>
- ソ^ンコ^ワ ミ^タ コ^タ ナカ トバ^ン。その子は見たことはないんだよ。(中男→青女) <平>
- シ^リバ マ^ク トバ^ーイ。端の方を巻くんですよ。(老女→同) <蚊>
- ソ^ンゲ^ン ナ^ッ トバ^イネ^ー。そんなになるのよねえ。(中女→中男) <長>
- ツ^エバ モ^タン^バ ウ^ゴカ^エン トバ^ノー。杖を持たなければ動かせないのですよね。(老女→同) <茂>
- ヤ^カマシ^カ トサ^ー。口やかましいのよね。(中女→老女) <田>
- バ^ッテ オ^スーノ モ^チー モ^ー シ^{チャ}ー オ^ラン トサ^ネー。けれども<私たちより>後の時代の者はもうしてはおらないのよねえ。(老女→同) <蚊>
- タ^ワラ^モ ア^ノー ヤ^ッパ ソ^ノ ナ^ワデ マ^ー ク^クッ^テ イ^ク トサ^ノー。僕もあのやはりその縄でまあくくっていくのよね。(老女) <蚊>
- オ^ウチ ド^コ イ^ク トヘ^ー。あなたどこへ行くのかねえ。(老女→同) <長>
- ソ^ガン ヤ^ッパ チ^ガウ トナ^ター。そんなにやっぱり違うんですねえ。(中女→老男) <小野>
- ア^ンタ イ^サハ^ヤサン イ^ク トノ^{マイ}。あんた諫早へ行くのかねえ。(老女→中女) <深>
- ム^スコ^ンコ^ワ ドケ^ー イ^キヨ^ット ノ^ノマイ。息子さんはどこへ行っているのかねえ。(中女→同) <手>
- ドケ^ー イ^タ トカ^ノマイ。どこへ行ったのかねえ。(中女→同) <手>

これら、「ト」を要素に持つ文末詞は、実に37種の多きを数えることができる。

この「ト」と似た地位に立つ奥能登地方の「カ°」を基素に持つ、いわゆる複合形文末詞が、たとえば珠洲地方で見た場合12種であるのにくらべて、「ト」を基素に持つ、当地

方の、いわゆる複合形文末詞が、いかに多彩であるかを知らされる。

ここにも、準体助詞「ト」から転成をみた「ト」文末詞要素の自在な活躍を見ることができる。

む す び

以上、肥前長崎地方の準体助詞「ト」、および、その転成になる諸事象について見てきたが、一連の諸事象が、当地方生活語の文表現を土地色に富むものになっていることは明らかである。すなわち、実名詞相当の機能を発揮する「ト」にせよ、形式名詞的な機能を発揮する「ト」にせよ、あるいは、順逆双方にわたる接続助詞の要素に生きる「ト」にせよ、かつまた、単純形文末詞「ト」、いちじるしい複合形文末詞の基素として、その成形成要素たりえている「ト」にせよ、「ト」は、方言表現の全野に、有力にその所在を見せている。当地方の文表現における「ト」音のひびきに、北陸人の筆者は、強い地方色を感じ取るものである。

今ここに、奥能登地方などに盛んな準体助詞「カ°」、および、その転成になる一連の諸事象と、当肥前長崎地方のそれとを比照してみるに、そこに、いくつかの差異を見出すことができる。主なこととして、

- ① 連体格の「ノ」を受ける準体助詞の用法の上で、奥能登地方にあっては、「ナンノカ°」「ドコノカ°」のように、「ノ」の先行語が疑問詞に限られる傾向があるのに対して、長崎地方では、そのような制約は見られない。
 - ② 奥能登地方では、順逆双方の接続助詞に準体助詞「カ°」要素を含むものが、ほとんど見られない（「イッタカ°サイニャー」〈行くと〉が1事例あるにすぎない）のに対して、長崎地方では、順逆双方にわたって、接続助詞に「ト」要素を含むものが多い。
 - ③ 奥能登珠洲地方では、いわゆる複合形文末詞の基素に「カ°」を有するものが12種であるのに対して、長崎地方にあっては、37種という多種にわたっている。
- などがあげられる。これらの差異は、やはり、肥前長崎地方における「ト」の盛況を語るものであろう。とともに、それは、日本語方言上の準体助詞の方処性を語るものと言えよう。

肥前長崎地方の準体助詞「ト」および、その転成になる一連の事象が、上に見たような盛況を呈することからして、これらは、将来も根強く命脈を保ち続けるもののように思われる。

以前に、奥能登地方の準体助詞「カ°」を見、今また、肥前長崎地方の準体助詞「ト」を見てきて、興味は、長門地方の準体助詞「ソ」（「ホ」）に注がれる。

今後は、「日本語方言の準体助詞」のテーマのもと、これら、「カ°」、「ト」、「ソ」（「ホ」）の統一的把握を念として、特に、三者の生態面についての比較討究を試みたいと思う。

注

< >の地名略示は、以下の要領による。

1. <長>…旧長崎市
2. <田>…長崎市田手原
3. <戸>…長崎市戸石町
4. <茂>…長崎市茂木町
5. <大>…長崎市茂木町大崎
6. <手>…長崎市手熊町
7. <串>…長崎県西彼杵郡西彼町大串
8. <平>…長崎県西彼杵郡西彼町平原
9. <宮>…長崎県西彼杵郡西彼町宮浦
10. <小>…長崎県西彼杵郡琴海町小口
11. <登>…長崎県西彼杵郡時津町登呂福
12. <子>…長崎県西彼杵郡時津町子々川
13. <白>…長崎県西彼杵郡大瀬戸町白浜
14. <檜>…長崎県西彼杵郡三重村檜山
15. <三>…長崎県西彼杵郡三重村平地
16. <高>…長崎県西彼杵郡高島町
17. <蚊>…長崎県西彼杵郡三和町蚊焼
18. <川>…長崎県西彼杵郡三和町川原
19. <樺>…長崎県西彼杵郡野母崎町樺島
20. <原>…大村市原口郷
21. <小野>…諫早市小野
22. <深>長崎県北高来郡猿崎町深海
23. <木>…長崎県南高来郡小浜町木指
24. <金>…長崎県南高来郡小浜町金浜
25. <口>…長崎県南高来郡口之津町
26. <奈>…長崎県南松浦郡奈良尾町